

長い夜

楊 富閔（訳・明田川 聡士）

今、ボクら三人は軽トラックの中にいる。窮屈に身を寄せ合い、この世界のすべてを窓の外にシャットアウトして。そして今、大内から離れる。

大内にやり手なし、ただアネゴがいるだけ、ただバアチャンがいるだけ。

ボクがねえちゃんのブログにコメントを入れ始めたのは去年の夏のこと。マンガーの花が綺麗に開く季節だった。ボクらの故郷——台南・大内。四方はどこも花の香りで、よい香りが曾文溪の流れに沿って玉井から幾つもカーブを描いて大内までゆらゆらやって来ると、ボクは去年の夏にあった大伯父の葬式を思い出した。葬儀の隊列は手に芳しいユリやテンニンギク、ヒマワリを持ちながら村境の村道を歩いていった。香りは麻の服や帽子、かぶり物に貼りつき、百人以上の子孫が排行の順で並び、それぞれの色の喪服で血縁関係を示しながら、道すがら廟を通り過ぎ橋を渡って道端の家々の前を通過し、火葬場まで歩いて行つた。でも、ボクとねえちゃんは隊列の最後に並び、若いのは喪服すら着ていなかった。

ボクは毎週金曜日の夜十二時にねえちゃんのブログ「大内のおんなの子」にコメントを書き込み、ねえちゃんと連絡を取るのが習慣になった。家系図の網を広げて、バーチャル空間でねえちゃんを大内の川岸にたぐり寄せようと思ひ、手もとに四人の計報の手紙を用意した。二〇〇〇年のひいばあちゃん・楊陳女^{イウケンヤウ}、二〇〇二年の大伯

父の嫁さん・楊陳懷珠、二〇〇五年の大伯母・鄭楊枝、そして最近では二〇〇七年の大伯父・楊永徳。一族の年長者の名前でメツセージを残し、誰からのものかわからなくしては切れ目なしにコメントしていった。亡き人の人柄で安心させ、逆にボクの口調と記憶をない交ぜにして書き込んでいった。ボクは家出したねえちゃんを取り戻したくて、夢の知らせのように何度も何度もうざったいほど、「大内のおんなの子」でねえちゃんと不孝者のことを語り合うのだった。

「不孝者だよッ！ 女が嫁に行かないなんて家に残って虎の妖怪にでもなろうとしてるんだろウ!? 結婚しない女の位牌は祀らないんだよッ！ 死んでも誰がお参りに来るって言うんだい!? お供えすらあげないからね！ 成仏できない餓鬼になるんだね！」大内のアネゴは毎日夕方五時に三合院（中庭を囲みコノ字型に連なる伝統的客棧）の前で運動するとき、小学生が教科書の内容を暗誦するようにボクに言って聞かせた。ボクは言ってあげた。「バアチャン！ バアチャンってひょうきん者だね！ どうしようもないねえちゃんだったら、幽霊になってもお腹が減るんじゃない？ ねえちゃんにはバアチャンにお仕置きしてるんだよ！ 本当に不孝者だよね！ バアチャンに毎日一回はねえちゃんのこと思い出させてさ！ 不孝者、不孝者って！」

バアチャンは大内のアネゴ。大内にやり手なし、ただアネゴがいるだけ。

この八年間、ボクらは三合院で恐ろしいほどの速さで連続四回も葬式を出した。死んじまったよ、とアネゴはいつも言った。「昔は中庭にいつも誰かがいたけど、今じゃアネゴ一匹だっついていない。みんな死んじまったよ」ボクは言ってあげた。「バアチャン、でもバアチャンがまだいるよ！ 話し声は大きいし！ しっかりしてるし！」ねえちゃんとボクは小さい頃から大内のアネゴに育ててもらった。バアチャンは典型的なお百姓さん。中背で皮膚の浅黒い健康なおばあちゃん。顔はどの角度から見ても大内朝天宮の媽祖さまによく似ていて、ぼちゃぼちゃぽっちゃりしていて、本当に優しそうだけれど、すごく付き合いつらい人で、ボクらの三合院では誰もバアチャン

の気にさわるようなことはできなかつた。遺産の分配や数百万元にもなる土地の補償金では、バアチャンはボクらの家の代表として一人で集会に出ていくけれど、その声はまるで雷さまが笑うのにそっくりだった。バアチャンが生涯に手にした果物は男の人数よりも多くて、育てたオレンジやアボカド、キンコーマンゴー、アーウィンマンゴーはいつも果物市場に持って行き、仲買人が丸ごと買うんだ。ごまかすことなくね。バアチャンは三十歳で夫に先立たれて、その後に赤ちゃんを一人で生んで、ずっと一人で二人の孫を今日まで育ててくれた。ボクらは貧しいわけじゃない。同世代で両親ともに元氣なクラスメイトと比べても、アネゴのボクとねえちゃんに対する教養のつけ方はすごかつた。アネゴはいつもイケてて、カッコよく野狼イェラフ一二五(台詞で七〇年代に発せられたオートバイ)にまたがつてボクらを学校に送るんだ——うちの三合院から大内小学校までは百メートルしか離れていなかったけれど。ヘルメット着用義務が始まる前から、二人にフルフェイスをかぶらせてどこにでも連れて行つた。ボクはバアチャンが左足でペダルを蹴る姿、エンジン音の中でバアチャンが歌う優しくセンチメンタルな歌声が忘れられない。「長い夜」を歌うアネゴの歌唱力は、星光大道シンクワンダーダオ(歌唱王を決めるテレビ番組)の決まり文句で言えば、「音程は大事じゃない。大事なのは、歌で物語を語るってこと」そのもので、歌うのが本当に好きだった。バアチャンの歌はどれも物語のようで、それはカッコよく軽トラを運転しボクらを善化の英会話教室に連れて行つたり、麻豆の私立中学まで送り迎えしたり、永康へマクドナルドを食べに行つたり、デパート屋上のミニSLを乗りに行つたりしたことを思い出させた。アネゴはボクらに弁が立つようになるため、たびたび日本語を教えてくれた。とても先見の明があり、しかもすごくガッツのあるおばあちゃんだった。ある年、ねえちゃんが学校から戻るとべそをかきながら、「わたし算数できないから、先生、死んじまえて言うんだよ」と話したことがあつた。アネゴはちょうど中庭で、その頃離婚して戻ってきていた大伯母と二人でドライマンゴーを干しているところだったけれど、怒りが抑えきれず、半分黒く腐つたキンコーマンゴーを握りしめて学校に向かつた。バアチャンは校内に乗り込み職員室を探し出し、

ドアから目を大きく見開いてねえちゃんの担任を見つけた。五メートルのところまで獲物をとらえ、キンコーマンゴーを先生に向かって投げつけたんだ。大声をあげてね。「あなた、何であたしの孫に死ねって言うんだッ！あたしは金払って死ねと言わせとるんかい！」真っ赤に着飾った先生も果汁を跳ね上らせたマンゴーのように罵り返した。「あなた誰なのよ！」「あたしが誰かって！みんなに聞けばいい！大内朝天宮裏の、楊の家だよ。であたしは蔡屎ツォアサイって言うんだよッ！夫の名字は楊だから、だからあたしの名前は楊蔡屎イウツツォアサイ！屎クセツタレとでも思えばいい！」アネゴの迫力は職員室全体を黙らせてしまった。本当に誰一人、バアチャンに言い返せる者がいなかったのを、ボクははつきり覚えている。ほかにも思い出すのは小学生の頃だ。大内のアネゴはだいぶ前から車のエンジンをふかしていて、四時に学校が終わるねえちゃんやボクと待ち合わせて台南の中心街に行こうとした。その時はまだ亡くなる前だった大伯父の嫁さんはボクらが出かけるのを見て、病院へ見舞いに行くものとはばかり思っていた。夜になって両目を少し腫らして戻ってきたものだから、誰かの病状がよくないのだとますます決めつけたんだ。でも、本当のことは、大伯父の嫁さんが亡くなる直前まで、ボクはうまく説明できないままだった。「あの日ね、バアチャンの運転でタイタニック見に行ったんだよ！」（あの世代のお年寄りには都会に出ることも多くなく、せいぜい奇美医療センターとか、成功大学医学部病院とかで、あるいは商売に成功して市街地に家を買った子供のところだったのかも）誰かがボクらの父母のことについて聞いてくると、アネゴはいつも「どっちもアメリカにいるんだよ。二人ともすぐく親孝行。お金を送ってきておまえたち二人の面倒をあたしに見させるんだよ。ただ戻ってくる時間がないだけさ」と言う。（何年も後になって、ボクはようやく気づいたんだ。ボクらはお父さん、お母さんとは決して口にしない。それは実に聞き慣れない言葉なんだ。そしてとうとう離ればなれの家族になってしまった）

毎年母の日には、ボクとねえちゃんは手作りのカードを一枚こしらえてアネゴにプレゼントした。「バアチャン！おばあちゃんの日、おめでとー！」（大内にやり手なし、ただアネゴがいるだけ、ただバアチャンがいるだけ）

ボクら祖母と孫の三人は誰が見ても寄る辺ない身で、三合院右側の部屋にこもっていた。十年来、三合院では連続四回も葬式を出したから、さすがの大内のアネゴも言っていた。「次はあたしの番かいね？」昔は騒々しかった三合院でも、今では誰もいなくなり、残すはボクら三人だけ。歩哨のように先祖代々の土地を守るだけで、外からの来客なんて誰も来なかったけれど、でもねえちゃん意外にも樂觀的だった。「わたしたちって、全世界を締め出してるのよ！」そう、全世界を締め出しているんだ。このセリフはアネゴの口癖に少しばかり似ている。孫も祖母によく似るっていうのは、このことなんだろう。そして、これもボクが後からようやく気づいたことだけれど、ねえちゃんは本当に世界のすべてを締め出す決意をしていたんだ。

ある金曜日の夜十時過ぎ、周りの家はすでに寝静まり、大内のアネゴはボクとまだ冴えた頭でシンクアップ星光大道（の星光大道）を見ていた。梁文音が絶対に勝つと賭けていたけれど、でもアネゴは頼銘偉の八家将とロツクンロールを融合させたパフォーマンズを見た後で言い直した。「神さまはもう御来場だね、この子が勝つんだよ」大内のアネゴは星光の大ファンだった。バアチャンが星光を見始めたのは去年の夏のことだったけれど、星光大道のほかに、リクオケ型男大主厨（番組）が好きで、チエニン阿基師は本当に色男だつて言っていた。そして大話新聞（論番組）を見て、リクオケ李濤がMCをつとめる全民開講（論番組）もチェックした。いつも興奮しながらコールインしようとしたけれど、電話代がもつたない、もつたないって言うから、ボクはバアチャンのためにケータイを契約してあげた。二台目は無料だからボクも一台持つていて、同じ回線どうしは無料通話で、バアチャンを探すには便利だった。バアチャンの呼び出し音はジェイ・チョウウのフォ・ユアンジア（中国・香港合作のカンフー映画「SPIRIT」の主題歌）だったりして、フォ、フォ、フォ、フォ、フォ、フォ、フォと、すつごくやかましかった。これなら大内のアネゴでも聞こえるんだ。本当のところ、バアチャンはもうほとんどオタク女子になってしまいそうなほど、時間がたくさん余っていた。大伯父の出棺の日には、送らずに一人で三合院に残って後片付けをしていたけれど、この時はもう、まるで三合院のス

ポークスマンのようにバアチャンが一番偉くなっていた。アネゴの言い分によれば、新年の対聯を貼り換えるのに忙しく、しつかり立っていないから背中からのけぞり中庭に倒れてしまったという。老人がひっくり返ったものだから、近くにいた人たちが大急ぎでバアチャンを麻豆新楼医院へ連れて行ってくれた。ボクらが葬式から戻ってくると、大内のアネゴは石膏で腕を固めて歩行器を握りながら、三合院で大声を出していた。「あたしを連れてこうだったって、そうはさせないよ！」これはそれから半年のあいだ、ボクが実家で兵役の通知を待ちながらバアチャンに付き添って運動しているときに聞く口癖で、何度も聞いていると、大伯父と一緒に連れて行ってくれなかったことに文句を言っているんじゃないかと、ときどき錯覚すら覚えたものだ。

あの夜、星光の優勝者はやはり八家将を披露した頼銘偉だった。名前が出てきたとき、大内のアネゴはもうソファでうつらうつらと居眠りしていた。ボクはそつとバアチャンを起こして、体を支えながら寝室に連れて行つた。ボクは教えてあげた。「頼銘偉だったよ！バアチャン大当たりだね、もしかして媽祖さまがバアチャンに言ったの？」「媽祖さまはとつくに寝ちまったよ。おまえの大伯父夫婦二人が玄関先に立って言ったんだよ」バアチャンは真面目な顔をして玄関の外を指さし、ほんやりとした眼で口ぶりは酔っ払いのようだった。でも、語気を強めて、「入ってこないで。外で立ってればいいからッ！」と言ったように聞こえた。

大内にやり手なし、ただアネゴがいるだけ、ただバアチャンがいるだけ。

ボクは無名小站ウーミンシアオジャン（かつて台湾最大級のソートヤルメデア）にサインインして、ねえちゃんのブログ「大内のおんなの子」にアクセスした。秘密の決まり事のように、ねえちゃんは毎週金曜日に新しい記事を書き、多かれ少なかれ近況について記していた。それをボクが見に来て、そしてアネゴに遠回しに伝える物語の語り手になりますのだった。昔はボくら祖母と孫の三人は互いに隠し立てすることなく、言っではいけないたくさん秘密を守っていた。でも、今ではおしゃべりさえもまるで別世界にいるみたいで、よいときには夢物語を話すかのように甘く、わるいときには遺言

を言い残すかのようだった。ボクらはウソっぽいおしゃべりをして、聞いているふりをするしかないのだ。

ボクはねえちゃんが新しく書いたブログをクリックした。「アイドル」というタイトルがついていた。

今日、生徒が模擬テストで作文を受けたんだけど、テーマがアイドルだったから、「先生のアイドルって誰ですか？」って、あとから聞かれちゃった。別の生徒がこっそりわたしに教えてくれたの。生徒のあいだで、わたしが和尚さんと付き合ってるという噂が広まっているって。台中の公益路にある誠品書店に出入りするのを見た人がいるんだってさ……丸坊主の男と一緒にあったってね。

読み終わると、ボクは急いで大伯母の鄭楊枝テイイウンギという名前でコメントを書き込んだ。ねえちゃんのアイドルにコメントを入れたのだ。

ボクたちのアイドルは、ほかにいないよ。バアチャンが一人で運転して佳里まで行って、大伯母を救出したこと覚えてる？ もう少し遅かったら、たぶん殴り殺されてたんだって。大伯母は四十年、五十年ってDV男に付き添ってきたけど、あの時代の女性が離婚するなんて全然ありえなかつたんだよ。三度の食事のたびに殴られたのはたぶん大伯母だけじゃないよね。でもさ、知ってるでしょ。バアチャンは怒りやすいつて。胸の前で組んだ両手にぶら下げた鍵をカチャンカチャンと鳴らして、相手の家の門をくぐると真つ先にその男に向かってピンタ三発くらわしたじゃない。「あんたに殴らせるため嫁がせたんじゃないんだよ！ 話すことなんて何もないよ！ 連れて帰るからね！」ボクらは軽トラ荷台の幌に隠れたまま佳里まで行って野次馬したけど、帰り道で、大泣きしてる大伯母を何度も慰めたじゃん。ねえちゃん、ねえちゃん忘れちゃったの？

ねえちゃんのアイドルはボクのアイドルなんだよ……

それからさ、ねえちゃんが台中にいるってこと教えてくれて、ありがとう。

鄭楊枝

不孝者について大内のアネゴは毎日一度はしゃべり、ときどき節をつけながらエンディングテーマにして歌ったりした。ボクは中庭をぐるぐる回って足の筋力をつける運動に付き添い、バアチャンにとって唯一の聴衆になってあげた。それは本当に情愛あふれる夏だった。ねえちゃんが決心してアネゴと対峙してから、もう一年が過ぎていた。今日の夕立は少し遅く、アネゴが話す物語は雨よりも早くやってきた。

「おまえのねえちゃんは本当に不孝者だよ。あんな中途半端な仙人みたいなところに嫁ぐなんて言うんだから。死に損ないの和尚がどうやって洗脳したのか知らないけど、脳みそ足りないんだよッ！ のぼせてるんだよッ！ 悪いものが乗り移ったんだよッ！ だからこのバアチャンをほっとけるんだよッ！ なんでもかんでも信じて、媽祖さまだけ信じてればいいのに！」

「バアチャン、バアチャンはいつも媽祖さまは寝てばかりいるって言うじゃない？」

「媽祖さまは目を覚ますけど、おまえのねえちゃんは目を覚まさない！ あいつは本当にハゲジイに洗脳されたんだよッ！ もう、お手上げだね！」

「でもさ、あのハゲには信者がたくさんいて、いいこともしてるんだよ。人が悟りをひらくのを助けるなんて、まるでテレビで法話をする和尚さんそっくりじゃない！ ネットじゃあ、あの人本当に有名なんだよねー」

「なんなんだい!? おまえたち大きくなったんだから、もう知らないよッ！ おまえもねえちゃんと一緒にハゲジイのことを信じるのかい!? 不孝者になったらいいんだよッ！ パソコンには毒が入ってるんだよッ！ パソコン

教の信者なのかい!? のぼせてるんだよッ! パソコンには情けなんてないんだよッ!」

パソコンに情けなし、バアチャンに情けあり。ボクはどうして不孝者になれようか。

去年、ねえちゃんが台南市で教育実習をしたとき、ネットではハゲと知り合った。あのときねえちゃんはここに住みながらアネゴの世話をしていたけれど、ハゲジイのことは、ボクは全部物語の語り手——アネゴから聞いたんだ。ちよつとずつ、毎日のように聞いたんだ。アネゴが言うには、ハゲは財産にたかり女を騙す詐欺師で、ねえちゃんは洗脳されちゃったって。前にねえちゃんがハゲジイを家に連れて帰りバアチャンに紹介しようとしたけど、ハゲは健康食品のギフトセットをたくさん土産に持って来ていた。バアチャンが言うには、ひと目見ただけで長く生きられないほどで、本当に弱々しかったって。星回りがすごく悪そうで、ねえちゃんが教員採用試験に順調に合格し専任教員になったのを知って、取り付いてねえちゃんの精気を吸い取ってるんだと。アネゴは疑心暗鬼になって、こうも言っていた。「もしかして、あのハゲ頭はベッドに連れ込んだかもしれない。可哀想に……」ボクがハゲジイを見たことは一度もないけれど、その人はまるで死神のように三人の生活にまわりつき、すでに一年あまりも経っていた。そう、目には見えないけど、一番よく知ってる見知らぬ人ってわけ。アネゴはボクに言った。ねえちゃんは振り返りもせず出て行ってしまい、ハゲジイが玄關先で待っていて、あまりの怒りでまるでじいちゃんが亡くなり一人残された時のように大泣きしたって。ねえちゃんは本当にひどい! 情け知らず。

この物語が嘘でないのは、ねえちゃんがこうしていなくなってしまう、ボクが「大内のおんなの子」でねえちゃんを探しては匿名のまま話をするようになったから。ねえちゃんの人生では自分がただの通りすがりの人になってしまい、信用できない弟になってから、ボクはようやくよく感づいたのだ——ねえちゃんにとって最初の決断だったのではないかと。

ボクはアネゴが言うことは本当だと思う。ねえちゃんのはつきり自分の考えをもたない人だっというこども。ボクらのバックには誰も余計な口出しなんかできない後ろ盾がいたからで、今までずっと何かを決断する必要なんてなかったのだから。ねえちゃんは人に釣られやすく、感動しやすく、耳に心地よい話を聞くのが好きで、見た目は小綺麗で、大きくなればなるほどチャン・ツイイーに似てきた。ねえちゃんの一生涯の事はどうやらすべてアネゴによって段取りをつけられていたようで、素直におとなしく期待されたような先生になり、眼鏡に合う男に嫁ぐということだった。ボクはいつも、アネゴは全然わかってないなと思ってた。ボクとねえちゃんがブログで一緒になって最初に作りあげたページが「長い夜」。それはまるでアネゴの歌声の中で再会することが運命づけられているかのようにだった。若者たちが自分のブログに歌詞を転載し、音声ファイルを再生するメディアプレイヤーを付けるのを好むように、ねえちゃんも貼り付けた。

わかっているの あなたは岸に泊まった船 知っているの 恋のはかなさを

今宵すぎて またつまらぬ日々 それが女の定めなの

ボクは歌詞を追いながら、プレイヤーから流れる「長い夜」を聞いていた。そして大伯母の鄭楊枝テイウウンギキという名前でコメントを加えようとキーボードを叩いた。

ねえちゃん、バアチャンから離れて自分で成長することを選んだんだよ。大伯母の結婚のことをしつかり覚えておくべきなのに。バアチャンがいつも口にしてた恋愛物語なんか、たぶんもつとよく知ってるんじゃないの。女の定めっていうのは大伯母とバアチャン。今だとねえちゃんじゃない。バアチャンが「尻に

敷かれる」のを嫌つてこと、よく知ってるでしょ。だから、嫁いだ大伯母を取り返すこともできなし、分家するためにひいばあちゃんと客間で罵りあつて、位牌を持つて行かせたことだつてあつたじゃない。バアチャンはいつも言つてたよね。「決まりを守らなくつちゃー!」つて。きつとバアチャンの若い頃の話を思い出すんじゃない? バアチャンとじいちゃんの恋ははかなくて、岸に泊まつた船のようつて。バアチャンつて、楊家にやつてきて数年でじいちゃんが牛車に轢かれて死んじやつたから、いつも恨んでたよね。あのと、じいちゃんと都会へ出ること決めてたけど、ひいばあちゃんが無理やり二人を田舎に残らせたんだつて。稼げなくて、苦しくて、牛車を引くしかなかつたんだよ。大伯父と大伯父の嫁さんは本当に意地悪で、バアチャンをいじめて、受け取つた賠償金を全部隠しちゃつて。バアチャンは言つてたよね。「あたしは一銭ももらつてないんだよ。死んだ人の連れ合いつてのはあたしのことなのに!」

バアチャンはただ嫁ぎ先が悪くて、尻に敷かれるんじゃないかつて心配してるんだよ。一番心配してるのはのぼせて、騙されちゃうじゃないかつて……

でも、ボクは信じなくちゃ——ボクのねえちゃんは、今は恋愛のために、命をかけてやつてやるうつていう決断をしたんでしよう?

鄭楊枝

ボクは次第に疑念が晴れてきた——ねえちゃんが家を出たのは、実は愛のためだったんだ。誰のために愛したのだろう? 詐欺師? 和尚? 邪教のエセ仙人? アネゴだつてたぶん知らないんだ。このハゲジイにびつたりな言い方は——ネット友だち、だつてことを。

ねえちゃんはまだネット友だちと駆け落ちしただけなんだよ。宗教家なのかもしれないけど、ネット友だちとね。

大内のアネゴは歩き疲れ、藤椅子を持ってきて中庭に座らせてくれと言った。西に落ちていく太陽の光を浴びたいと。台湾南部のお天道さまは三合院すべての窓格子と戸口を斜めに照らしていた。扉が閉じられ鍵をしつかりとかけられたままの大伯父の部屋を照らし、昔は大伯母が寝起きしていた角の部屋を照らし、アネゴの野狼一二五それから軽トラを照らしている。ボクはアネゴのそばにべたつと座り、顔を上げて歌声に静かに聞き入った。

わかっているの あなたは岸に泊まった船 知っているの 恋のはかなさを

今宵すぎて またつまらぬ日々 それが女の定めなの

山の方から漂ってきたどんよりとした雲は消え、今日の雷雨は空の向こうでひどく蒸したまま雨粒にならず、アネゴの目尻についた涙によく似ていた。あたりは静かで、音もなく、動きもなかった。

大内のアネゴはいつも、大伯父が死んでから自分たち親戚はますます疎遠になって、年寄りも老いぼれ、若いのはお互い挨拶することすら少なくなったと言っていた。ボクはよく嘆きを聞かされたけれど、バアチャンが口を開けばそれはまるで大内の歴史であるかのようにだった。突然、ボクにははつきりとわかった。どの家のおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃんの一生も地域の発展史であり、細切れになった中華民国史で、短い昭和の歴史でもあることを。では、今、バアチャンたちはどの時代まで来たのだろうか？

ボクが十年來の四回もの葬儀を懐かしく思うのは、ワイワイガヤガヤと、ひとつの家族の栄耀榮華を見ることができたからだ。葬儀の煩わしい決まりや礼節はかえって日頃疎遠になっていたボクらにそれを感じさせるチャンスだった。ひいばあちゃんが亡くなったとき、ボクとねえちゃんが三十数人のおばさんや従姉妹たちと一緒に大きな棺桶を囲んで本当に泣いたり、嘘泣きしたりしたことが懐かしくなった。あるときボクらはみんな、位牌

を置く部屋の外側で起きる。たごたを忘れ、ただ一心にやるべきことをやるだけだった。泣いて涙を見せること。それから大伯母の出棺の日には、大内のアネゴが泣きながら歌うかのように大伯母の人生と運命を語り、その場にいる人もまるでバアチャンの物語どおりに生きてきたかのように感じていたのも懐かしい。ボクらは用事ができたらそれをやり、目的もなしにこの世をさまよっているわけじゃない。ボくらには帰る家があり、担ぐべき棺桶がある。大伯父の嫁さんの告別式も懐かしい。三合院で演じられる伝統的しきたり——野辺送りの挽歌、泣き女、楽隊、そして日夜家族みんなで三合院の前に大きな円を作り、あの世で使う百億元以上にも匹敵する紙銭を燃やしたことを。なんて懐かしい葬式の時間なのだろう。毎回ボクは出棺の帰り道を歩くのが嫌だった。死という文字で結ばれた大きな繋がりが、ばらばらになったり、ちよん切れたりするのではないかと思うと不安だった。もう二度と結び直せないということがわかっていたから。ボくらには泣くときには泣き、笑うときには笑い、全世界と同じ土俵に立っているなんて考えたこともなかった。むしろ世界を締め出しているようであった。それでも急速な死は一族に急激な没落をもたらし、一族の没落は、いつも地域の衰退と結びついた。この忘れ去られた地域は、あの誰もお参りなどしない寂しげな墓に垂れるススキや、どんととした目で老人ホームのグループルームで娯楽番組を見ているお年寄りたちとどんな違いがあるというのだろうか？ボクらの大内はこんなにも孤独なのに、隣に面した宮田は総統の出身地や菱の実で有名で、玉井はマンゴーで日本に進出し、新市のサイエンスパークは善化の不動産に活気をもたらしている。七股は塩田やクロツラヘラサギで国民の目の中で輝いている。ボクらの地域——大内には、いったい何があるのだろうか？先住民の平埔族？アボカド？それとも陳金鋒チエンジンフオン（台湾人のメジ）？ある年、ボクらの地域の曲溪村の入り口に天文台が作られたことがあった。球形の建築物はまるで山の中腹に突き出た野生のキノコで、アネゴは言っていた。「死に損ないだよ。あの天文台はあたしみたいな年寄りが登っていくと、ついでに埋められちゃうんじゃないかね。古墳みたいになつかいんだから！誰が行くって言うんだい？」それは実にうまく言

った表現で、天文台は大内で有名な悪地にできた瘤のようで、見るためだけのものになった。

見るためだけのものになった。

ボクらの毎日は平板でつまらなく、輝かしい人生はすでに終わってしまったのではないかといつも感じていた。まるでアネゴの青春が終わってしまったかのように。ボクらの一切はすべて無意味なものなのだ。

ボクはいつも考える。ここみたいに若者が大量に出て行き、年寄りが大勢往生した後の古びた地域は、将来、いつたい何が残るといふのだろうか？ボクらの大内、ボクらの三合院、大内のアネゴ、ほかにはいつたい何だろうか？

「心だね。人には心がある。パソコンには心がない」大内のアネゴが言ったことだ。言い方を変えれば、人には情けがあり、パソコンには情けなんてないのだ。

金曜日の夜は、いつものように星光大道の放送時間だ。すやすやと眠る大内で、ボクラ祖母と孫は星光二班から星光三班（星光大道の続々編）まで見てきた。でも、大内のアネゴはいつも十時をまわると居眠りを始め、もう前のよう感情移入して歌がうまいとか下手くそだとか一緒に言い合ったりすることはなかった。だからボクはときどきトク番組にチャンネルを切り替えた。路地の入り口では野良犬がしきりに吠えている。白々とした街灯を目覚めさせ、大内のアネゴをゆすり起こした。「死に損ないの犬ころだよ。あんなに吠えて、まさかお化けでも見たのかねえ」「たぶんご先祖さまが戻って来るのを見たんじゃない？」「みんなあの世に行っちゃったって言うのに。戻って来るなんてどうしてまた……」ボクはいつもふと、大内のアネゴの口ぶりの中にある考えを、つまりバアチャンの背後に広がる大きな大きな寂しさを思うのだ——大内にやり手なし、ただアネゴがいるだけ、ただ孤独な年寄りがいるだけ。アネゴは体を起こして部屋に戻って寝ようとすると、聞いてきた。「あの不孝者は最近またおまえとパソコンで繋がってるのかい？可哀想に、姉弟で話をするのにパソコンが必要だなんて、口がきけないわけじゃないだろうに。パソコン教の信者だから、のぼせちゃったんだよ……」「バアチャン、バアチャン

もパソコン習つたらいいじゃない。都会じゃたくさんのお年寄りが文章を書いてネットに発表してるんだから！世界と同じ土俵に立つってこのことじゃない。バアチャンって流行最前線なんじゃないの！」「そんなに野心が大きいかい!? 世界と同じ土俵に立ちたいだつて? おまえのねえちゃんは、あの不孝者は、自分がどこにいるかもわからないのに……おまえたち若いのはねえ、自分が誰かつてもわからなくなっちゃダメなんだよ」

ねえちゃんのブログ「大内のおんなの子」をクリックすると、そこは不思議な空間で、まるで何世代もの人々の物語をアップロードできるかのように思えた。ねえちゃんは続けて「老い」「病い」「死」という三つの記事を載せていた。ボクはひとつひとつ読んでから亡き人の声で、まるで魂が戻ってきたかのようにねえちゃんと対話をする。ねえちゃんが物語を語るのを聞くのだった。

「老い」

弟へ――

これ、おねえちゃんが見せてあげる日記だよ。最近病院を出たり入ったりすることが多くて、この世界、全部病気なんじゃないのって思うくらい。コンビニに行つてOPENちゃん(台湾のセラニイゼンターのマスコットキャラクター)の等身大立て看板を見た時なんか泣き出しちゃって、お会計のときレシート受け取るのも忘れちゃった。OPENちゃんって、見た目が宇宙人じゃない? わたし右手伸ばして人差し指で触って、店の入り口ですっとほうつとしてんだ。その日、生徒の作文を直したんだけど、文章クソ下手。ほとんど何言ってるのかわからなくて意味不明。字を追ってみんなの細々とした途切れ途切れの文章を読んだけど、もしかして自分って読み込めない学習障害

じゃないかなとさえ思った。ねえ、わたしたちって、この世界とますます意思疎通できなくなってるない？
あの人、化学療法中なの。髪の毛、全部抜けちゃった。老いと病いと死って、一緒に来るのかな？

ねえちゃんがブログでここまで書いたとき、ハゲジイはすでに末期癌だった。なんだか、物語はここから始まるような感じだ。主人公の女が先に結末を語り、ボクはさかのぼるだけ。それとも、読んでいくのを綺麗さっぱりやめるしかないのだろうか。ねえちゃんのことをちょっと不安に思ったのは、文章の中からねえちゃんの変化がわかったから。ねえちゃん、成長したのかな？それともボクが年寄りくさくなってきたのかな？コメントしてみた。

バアチャンは朝晩必ずお線香を焚いて、三六五日でだいたい百日くらいが祭祀の日だね。いろんな神さまを拜んでるよ。バアチャンにとって一番大きな支出は生活費以外には、神さまにあげる分だね。お線香を持つと、煙がくすぐって涙がぼたぼた垂れてさ。バアチャンは誰と話ししてるのかな？ 媽祖さま？ 地藏菩薩かも？ 仲の良かった兄弟？ それとも何代も前のご先祖さまかな？ もしかしたら自分に話しかけて、自分自身をかまってるのかもね。ブツブツ話して自分に聞かせてるんだよ。この数年の葬儀であつた、いろいろなしてきたりのようにね。あれって全部生きてる人に見せるためでしょ？ 全部自分たちでやって自分たちで見るためだけなんじゃないの？ それこそ、しきたりなんだよね。

ねえちゃんさ、ボクらのこの世界って、まだしきたりだらけなんじゃないのかな？

楊陳懷珠

ボクは二つ目の「病い」をクリックした。

「病つ」

病院に出入りしていると、全身消毒液のにおいになる。あの人、化学療法を続けて、髪の毛全部抜けちゃった。バアチャンが外れてたのは、ハゲのおっさん昔は禿げてなかったっていうこと。あの人、昔は髪の毛がふさふさだったんだよ。当たってるのは見た感じ健康じゃなくて、長く生きられないってことかな。病院の中庭を散歩してるとね、いろんな国から来た外国人のお手伝いさんがお年寄りを押しながら花壇の前で集まっているのを見かけるの。お手伝いさんたちはおしゃべりしたり、はしゃいだりしてるけど、あの点滴をつけたままの、鼻に管を挿したままのお年寄りは頭をぶらぶら垂らしたまま。廃品回収のゴミ箱の前に捨てられた大小のゴミと全然変わらないじゃない。ほら、わたしね、大内の田舎にいるお年寄りたちを思い出すの。歳とって老人ホームに入ったとか、一人寂しく昔からの家に住んでるとか。みんな普通は高雄とかサイエンスパークとか一生のうちでまだ行ったこともない台北の方とかによくできた息子やお嫁さんがいて、孫たちはせいぜい夏休みとか冬休みに戻ってくるだけなのよ。半年に十数センチも背が伸びたりしてるから、長いあいだに一度会うかどうかのおじいちゃんおばちゃんもとうとう誰が誰だかわからなくなって、間違つてさ、ほかの人の子供じゃないかなんて錯覚しちゃう。ねえ、わたし、バアチャンが懐かしいの。ふるさとで三度の食事のたびに運動して太極拳したりフォークダンスしたり手脚をぐるぐる回してるお年寄りも懐かしいの。みんな若いときからすぐ元気で、ライチの林やマンゴーの樹の下を行ったり来たりして、体力は今までずっと平均以上だったけど、どうして歳をとつてもあんなに力強く運動できるんだらうね。わたしすぐ大胆に推測するんだけど、みんな健康のためなんじゃない？もしかすると、いつか血管が詰まって手脚が麻痺して動けなくなつて、子供たちに迷惑かけるんじゃないかって不安なんじゃないのかな。介護センターに担

がれていくんじゃないかって、もつと不安で。みんなさ、たぶん死ぬのが怖いんじゃないのよ。死んだ後に息子は中国、娘はアメリカ、孫は予備校、嫁は社内会議で時間さえなくてご臨終に立ち会ってくれないんじゃないかってことの方が怖いよ。ねえ、臨終って、いったい誰が誰を看取るのかな？

読み終わると、ボクには直感が働いた——ねえちゃん、戻ってくる。ねえちゃんは確かにのぼせちゃったけど、でもものぼせるっていうのはある種の執着じゃないかな。執着するには痛みが生じる。ボクはねえちゃんの痛みがわかるんだ。ねえちゃんのプログは、ふるさとでの昔のことをたくさん振り返っている。ボクにはもうほとんど見えてるんだ。ねえちゃんが家の門まで来てるってことが。

ボクは大伯父の名前でねえちゃんの「病い」にコメントした。

ねえちゃん、ボク、ねえちゃんの気持ちわかるよ。意思疎通できないことへの焦りと不安。言うべき言葉も応じる話もないっていうのがわかるんだ。ねえちゃんの中の心の中にも大内があるけど、でもねえちゃんの大内って、もつと閉鎖的で、もつと孤立していて、無縁墓地さながら荒地の草がつかつるを伸ばして生えてるようなところですよ。そこには誰も話す人なんていなくて、みんなの生活はもうほとんどジエスチャーとか顔の表情とかを残すだけなんだよね。それってまるでボクらが出会うバーチャル空間のように、いろんな顔文字と猥雑で歪んだ動画があるようなものじゃない？ ねえちゃん、ボクらとか、ふるさとの外には目に見えない河の流れがあるんだよ。ボクさ、思うんだけど、それって曾文溪で、流れが大内の外れをゆるらまわって、ふと見ると城壁の外濠のようになってるんじゃないの？ ボクにはそれが測ることもできないほ

ど深い溝なんじゃないかって思えるんだ。

ねえちゃん、ねえちゃんにしてみれば、大伯父や大伯母の世代とか、まして訃報の手紙なんかには載せきれないような遠い親戚の名前を全部書き込んでみたとしても、記号のようなものではないんでしょ？一族の血筋の大きな繋がりをネットの世界に持ち込んだとしても、訃報の中で一緒の列に並んだことのある兄弟姉妹なんか（台湾では訃報の通知に、喪主を始め一族の名前を併行の順に書き連ねる）、今じゃあ全く疎遠で、ネットのIDとかニックネームとかネット仲間とか何も変わらないんじゃないかな？ボクとねえちゃんも、ただのネット友だちにすぎないのかもね？

いろんな数字だつて、この番号と変わらないんじゃないの 092089498

楊永徳

三つ目をクリックした。タイトルは「死」。

「死」

あの人、逝っちゃった。みんな告別式の会場の外で何百人も跪いてた。生き仏だから、お役目が済んだら仙界に戻るんだと言っていた。わたしはただ涙を流して、たくさんの方がいるなあつて感じただけ。あの人のお母さん、息子には外国で博士の学位を取らせたかった、自分の心はもう粉々に砕けそう、と言っていた。わたし、コンビニに行つてOPENちゃんを探したの。右手の人差し指を伸ばして触つてみたけど、誰も何も言つてこなかった。

「ブログはこの三日間に立て続けに更新されたものだった。のぼせた時間はもう過ぎて、ねえちゃんの考え方がなんだかすべてわかったような気がした。だからすぐにひいばあちゃんの名前でコメントを残したんだ。」

ねえちゃん、ボクラには行くところなんてないよ。ボクラは家に帰るしかないんだよ。大内は、そこはいつでも安全だよ。

楊陳女

深い深い真夜中。ボクはまるで一步で何千年も歩いてきたような感じがした。夜は、どうしてこんなに長いのだろうか？

五時、ボクはログアウトした。ちょうどそのとき大内のアネゴが戸を押し入ってきて大声で言った。「もう朝だよ。あたしは目が覚めたっていうのに、おまえはまだ寝てないのかい！ おまえもパソコンで遊びすぎたのぼせちゃったのかい！」寝静まった田舎にやさしい雄鶏の音が響く。なんて美しい夜明けなんだろう。ボクはアネゴの気迫たっぷりの叱り声を聞いていた。アネゴが歩行器を抱えて霧のかかった中庭に出ると、そこはまるで仙界のようだった。ボクは室内に戻るバアチャンの歩調に合わせて入っていった。「今日だれか帰ってくるんだってさ」「そおうかい」三合院には長いことお客さんなんて誰も来てないけど、誰が来るのかアネゴにはわかったのだろうか？「空が明るくなれば帰って来るから、そのときになったら迎えに行こうよ」「わかった。夜は台南駅の方で食事でもしようかい」ボクラの会話はなんだか大きな真実を通り越して、そして動揺してしまっただ感情を意図的に見落としているかのようにだった。時間が逆戻りしてまた前に進んでいる感じがしたので、客間の方を向いたり、三合院に背を向けたりしてみた。ボクには大内のアネゴが野狼一二五に三人乗りしているのが

見えたような気がする——オレンジの木ばかりが続く小道を通り抜け、前にまたがったアネゴの歌声がそよ風と同時に流れてくる。それは「長い夜」の長く哀愁に満ちたメロディーで、いつもボクらはバイクが道の外れに着いたかと思うと、夜は明け、空が明るくなっているのだった。

ボクは客間の椅子で寝入ってしまった。まるで歴代のご先祖の隣で寝てしまったかのようで、それはまるで一度死んで生き返ったかのようにも思えた。なんだか客間に並べてある棺桶の列の夢をみたかのようにだった。ひっそり静まり返った室内は、ボクを安心させ、ぐっすりとお眠らせてくれた。夢の中で、ボクはアネゴが代々の亡き人に向かって話をするのが、かすかに聞こえた。「楊家のご先祖さま、今日あたしんこの孫娘が帰ってきます。どうか、お守りください。孫娘の一切がうまくいきますようお守りください。それから、あたしのこの孫息子は大学を卒業したばかりで、もうじき兵役につきますが、小さい頃から友だちもおらず、家ではおしゃべりだけど、外じゃあまるで唾にでもなったよう。あたしとこの子のおねえちゃんだけが唯一の頼り、なんです。体も本当に弱くて、兵隊さんになってもやっていけないでしょうか？ あたしは本当に心配で心配で……」

お天道さまが姿を見せ、客間を照らし、ボクを照らした。そっと目を開けると大内のアネゴが雑巾をしぼり、軽トラを拭いてるのが見えた——こんな静かで安らかな場所で、八時になったというのに、まだ物音ひとつない。そして突然……

フオ！ フオ！ フオ！フオ！ フオ！フオ！フオ！ フオ！

フオ！ フオ！ フオ！フオ！ フオ！フオ！フオ！ フオ！

フオ！ フオ！ フオ！フオ！ フオ！フオ！フオ！ フオ！

神々と先祖の位牌を並べた客間の机で、名もなき四角形の物体が緑色の光を発しながら音を立てた。三合院で鳴り響き、フオ、フオ、フオフオと母屋の左右の建物にぶつかると、デシベルはほとんどどんどん大きくなっていた。大伯父の出棺以来、しばらくこんな甲高い音なんて聞いてない。寝ぼけ眼のまま驚いて飛び起きると、扉の外に向かって大声で叫んだ。「バアチャン！ ケータイ！ バアチャンのジエイ！」近くからアネゴがよっこらよっこらとやって来た。ボクはわざと電話を取らなかった。三合院が突然フオ、フオ、フオフオと鳴りだした。まるで丹田に力を入れて血色のよい顔色のお年寄りが気功をしているかのように。フオ、フオ、フオフオ。アネゴはケータイを取り上げ、「フオフオフオフオ、わかった！ わかった！ もうフオなんて言わなくていいよ！ さつきお参りしたんだけど、ジエイを置き忘れちゃったな。年寄りには物覚えが悪いもんだよ。誰の電話かな？」

「Hello, this is 楊蔡尿」

ボクは隣でプツと吹き出し、激しく全身で笑ってしまった。三合院の中の、ボクらの大内だ。アネゴはこんなにもドンと構えて電話をしている。片手で歩行器を押さえて、片手で電話を握り、まるで噂話でもするかのように絶えずことわざや名句を混ぜながら、国語教師の孫娘の自慢話をしているみたいだ。大内のアネゴがしゃべる横顔は、さながら大内朝天宮の媽祖さまのようだ。バアチャンはいつまでも元気なんだ。

今、ボくら三人は軽トラックの中にいる。窮屈に身を寄せ合い、この世界のすべてを窓の外にシャットアウトして。そして今、大内から離れる。

大内にやり手なし、ただアネゴがいるだけ、ただバアチャンがいるだけ。

【解説】 二十世紀中国語圏文学の一角——楊富閔

明田川 聡士

楊富閔ようふびんは一九八七年、台湾・台南市大内区生まれの作家、エッセイストである。国立台湾大学台湾文学研究所博士課程修了。現在は創作の傍ら、台湾大学中文系や国立清華大学中文系、東呉大学中文系などでも教壇に立つ。著作には、短編小説集『花甲男孩』（台北・九歌、二〇一〇年）、『賀新郎——楊富閔自選集』（台北・九歌、二〇二〇年）、エッセイ集『為阿嬷做傻事——解嚴後台湾团仔心靈小史一』（台北・九歌、二〇一三年）、『我的媽媽欠栽培——解嚴後台湾团仔心靈小史二』（台北・九歌、二〇一三年）、『休書——我的台南戶外写作生活』（台南・台南市文化局、二〇一四年）、『書店本事——在你心中的那些書店』（台北・新銳數位、二〇一六年）、『故事書——福地福人居』（台北・九歌、二〇一八年）、『故事書——三合院靈光乍現』（台北・九歌、二〇一八年）、『台境平安』（台北・皇冠、二〇二二年）などがある。

今回翻訳した「長い夜」（原題・暝哪会這呢長）は、代表作『花甲男孩』ならびに自選集『賀新郎』の巻頭小説であり、楊富閔が台中の東海大学中文系に在学中の二〇〇八年に発表した短編小説である。同作は「全国台湾文学堂創作獎」での大賞受賞作であり、この年に台湾で発表された話題作を収録した季季編『九十七年小説選』（台北・九歌、二〇〇九年）にも最年少作品として選出された。また、台湾のほか中国や香港の小説も含む中国語圏現代文学の作品集である、鍾怡雯・陳大為編『天下小説選 一——一九七〇——二〇一〇 世界中文小説』（台北・天下遠見、二〇一〇年）、および陳大為・鍾怡雯編『華文小説百年選——台湾卷二』（台北・九歌、二〇一八年）などにも収録されるなど、現在、楊富閔は台湾文学界だけではなく、二十世紀中国語圏文学における新進の青年作家として注目されている。今回の翻訳にあたっては、自選集『賀新郎』所収の版本を底本とした。人名のルビには、適宜、台湾語や中国語の音に相当するカタカナを振った。

「長い夜」の原題である「暝哪會這呢長」とは、台湾語で「夜はなぜこれほど長いのか」という意味を示すが、これはもともと台湾の女性歌手・江美麗（一九五八年生）が一九九二年に歌った同名の台湾語歌謡曲のタイトルに由来する。一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて黄小琥、江蕙など複数の台湾語歌手によってもカバーソングとして歌われた流行歌である。作中では、歌曲さびの部分の歌詞を複数回引用しているほか、テレビ番組「星光大道」「型男大主厨」「大話新聞」「全民開講」、ソーシャルメディア「無名小站」、人気歌手「梁文音」「賴銘偉」（梁文音と賴銘偉はいずれも星光大道での優勝者）「ジエイ・チヨウ」（台湾出身の中華圏のタレント、著名人「阿基師」（政府主催晩餐会での代表シェフ）、プロ野球選手（かつてはメジャーリーグに在籍していた台湾人投手））「カンフー映画『SPIRIT』（政府主催晩餐会での代表シェフ）」の主題歌「フォ・ユアン手」「陳金鋒」（台湾人初のメジャーリーグとしてドジャースで活躍）、カンフー映画『SPIRIT』（台湾出身の中華圏のタレント、著名人「阿基師」（政府主催晩餐会での代表シェフ）、プロ野球選手（かつてはメジャーリーグに在籍していた台湾人投手））、カンフー映画『SPIRIT』（政府主催晩餐会での代表シェフ）の主題歌「フォ・ユアンジア」（霍元甲）など、二〇〇〇年代台湾で流行したテレビ番組やエンターテインメントなどサブカルチャーを巧みに下敷きにしている。

物語の展開においては、台湾南部の農村地区である台南・大内で暮らす語り手の少年「ボク」が同居する祖母「バアチャン」について語り、台中の都会で離れて暮らす姉「ねえちゃん」をめぐるエピソードも挿話される。一つの家族の様子を描きながら、農村から都市への人口移動が進む中で廃れゆく郷土に対する深い愛情をつづる小説となっている。戦後の台湾文学界では一九六〇年代後半から七〇年代にかけて、高度経済成長期における急速な都市化の弊害を痛烈に批判する「郷土文学」が流行したが、楊富閔の同作はその系譜にありながらも、現代のサブカルやエンタメ現象を好意的に取り入れた独特の作風を作り上げている。また、原文では地の文や会話文で台湾語のほか台湾華語をふんだんに取り入れていて、その創作は現在の台湾文学界の潮流の一端を呈すると同時に、二十一世紀中国語圏文学の一角としても見て取ることができる。

「長い夜」を所収した『花甲男孩』は、その後台湾で連続テレビドラマ『花甲男孩転大人』（二〇一七年、Netflix）の邦題・お花畑から来た少年）や正月映画『花甲大人転男孩』（二〇一八年）などにも翻案され、いず

れも台湾のシンガーソングライター・盧広仲（クラウド・ルー）が主演をつとめ好演している。ドラマ『花甲男孩転大人』での原作小説との比較については、明田川聡士『戦後台湾の文学と歴史・社会——客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学』（関西学院大学出版会、二〇二二年）の第七章「新郷土小説と「七年級」作家——楊富閔「暝哪会這呢長」と『花甲男孩』、テレビドラマ『花甲男孩転大人』の関係」を参照されたい。なお、ほかに楊富閔作品の既訳では、同じく『花甲男孩』所収作品である「聴こえない」（藤井省三訳、『すばる』第三七巻第一一号、二〇一五年）がある。

